

今回から、弟子たちがイエスの死にどう向き合い、師が残されたいくつかの「謎」をいかに受けとめたか。また、『キリスト教を理解するための鍵は、「イエスの復活」への信仰をどのように理解するか』にあり、『キリスト教信仰は、この復活信仰めきにはあり得ない』(百瀬文晃師、元上智大学神学部教授)といわれる〈復活〉について考えていきたいと思えます。

✦ イエスの十字架上の死と復活 (7) その後の弟子たちと「復活」の出来事

イエスは敵対者たちにあざけられ、弟子たちにも見捨てられ、孤独のうちに最期を迎えました。まさに屈辱的な死を遂げたのでした。しかしその後、大きな〈大逆転〉のドラマが待っていたのです。

そのとき弟子たちは …

イエスが十字架上で生涯を閉じたとき、弟子たちはその場にいませんでした。ゲッセマネの園でのイエス逮捕劇の際、一緒に捕まるのを避けるため彼らはイエスを見捨てて逃げてしまったことを第44回で書きました。その後、イエスが十字架刑にかけられ死を迎えるまで、彼らの多くはエルサレムやベタニア(エルサレムから東へ約3kmの町)あたりに潜んでいたといわれます。彼らは自分たちがイエスの仲間であることがわかれば神殿関係者や群集に捕らえられ、同じような罰を受けるだろうと怯え、身を隠していたのです。『あなたのためなら命を捨てます』(ヨハネ 13-37)とまで言っていたのに、結局は師を見棄てたという罪責感、人間としての弱さや卑劣さに心を苛まれてもいたでしょう。「こんな自分たちをイエスさまはどう思っていたらさう。おそらく十字架上で、俺たちに対する怒りと恨みの中で死を迎えたのでないだろうか …」。遠藤周作氏は『彼らが(中略)恐れたのは十字架での師の怒りであり呪詛だった。自分を見棄て、裏切った弟子たちにたいして師が神の罰を求めることだった』と書いています。

また彼らは、予想もしなかったイエスの生涯の悲惨な結末に戸惑い、その意味について考えていたはず。ユダヤの人々と同じように、反ローマ運動の力強いメシアとして思い描いたけれど、その期待に応えることなく、ただ神と隣人への愛を説いていたイエス。各地で福音を宣べ伝え、ときには人々の病を癒す奇跡を起こしたイエスは、十字架上でもその力を発揮するはずだと信じていたにちがいません。しかし、伝え聞いた限りそれもまた起こらなかったのです。彼に託した大きな夢と希望が無残にも砕け散ったとき、弟子たちは底知れぬ失望と落胆の中に放り込まれました。「イエスに従った俺たちの人生は、いったいどんな意味があったのか?」。

そして彼らには、解かねばならない大きな「謎」がありました。「イエスはなぜ、十字架上の死を遂げなければならなかったのか?」、「なぜその時、神は沈黙していらしたのか?」ということです。

そんな弟子たちが、その後しばらくしてエルサレムに立ち戻り「イエスは生きている」と語り始めます。そして彼らは、さまざまな迫害に屈することなく「イエスの復活」への信仰を公言し「イ

イエスはキリスト(救い主)である」ことを命がけで宣教するようになります。人間的に弱く小さな存在であった弟子たちに何が起こったのか？ 何が彼らを変えたのかを見ていきたいと思います。

「父よ、彼らをお赦してください。」

十字架上でイエスは何を語ったのか。前回、イエスの「最期の言葉」について書きました。ひとつ付け加えると、『ルカ』23章に次のような一節があります。

イエスの左右に、二人の犯罪人も十字架につけられました。

.....
34 [そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」] (傍点、筆者)
.....

今まさに息絶えようとするイエスの口から出たのは、『父よ、彼らをお赦してください』という言葉でした。「彼ら」とは、イエスを捕らえ十字架にかけた祭司長や律法学者などの神殿関係者や民衆らを指すと同時に、弟子たちも含まれているはずで

す。イエスは弟子たちに、恨みごと怒りの言葉も発しませんでした。神の罰をも求めませんでした。それどころか、自分を見棄て逃げ去った弟子たちや、自分を死に追いやった人々の「救い」を神に願ったのです。この事実を知った弟子たちの驚きと感動は、どれほどのものだったでしょう。しかし、「彼らとその心情をいつまでも持続できる人間だったのだろうか」と考えた遠藤氏は彼らに『別の次元から何か筆舌では言えぬ衝撃的な出来事が起こった』からこそ、死をも厭わぬ宣教活動をおこなうことができたのではないかと書いています。では、その衝撃的な出来事とは何だったのでしょうか。

イエスは「復活」された！

イエスの亡骸は十字架から降ろされて亜麻布で包まれ、岩を掘ってつくった墓に納められ、入り口に大きな石が置かれました。金曜日の午後だったといわれます。その3日後の「週始めの日」すなわち日曜日の朝、ある出来事が起こります。『マルコ』16章を読んでみましょう。

.....
1 安息日が終わると、マグダラのマリア(㊤1)、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油(㊤2)を塗りに行くために香料を買った。2 そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。3 彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。4 ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。5 墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。6 若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを探しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。[ここはイエスさまのご遺体を]お納めした場所である。7 さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」8 婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。([]内は筆者)
.....

【㊤1】マグダラのマリア：ガリラヤ湖畔マグダラ出身の聖女。「7つの悪霊にとりつかれた」精神的病からイエ

スによって癒され、以後彼の弟子として宣教や生活上の配慮で奉仕する。イエスの受難の時に十字架近くにいた女性。そのあと、墓にまでつき従った。

【㊥2】油：香油のこと。ユダヤ人の習わしで、このような世話は女性の役目だった。

ほかの福音書の記述はどうなっているかというと ——

『マタイ』(28章1～8節)では『マグダラのマリアともう一人のマリア』が墓に行くと、大きな地震が起こり、〈主の天使〉が天から降^{くだ}って石をどけ、イエスの復活を告げます。婦人たちは喜び、弟子たちに知らせるために走って行くと、行く手にイエスが立っていて、『わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい』と告げます。『マタイ』だけに〈イエス〉が復活した姿を見せたという記述が見られます。

『ルカ』(24章1～12節)では、婦人たちが墓に行くと石は取り除かれていて、入ってみると遺体はなく、そのうちに『輝く衣を着た二人の人が現れ』イエスの復活を告げます。婦人たち(マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、他の女性たち)は、弟子たちに出来事を伝えます。

『ヨハネ』(20節1～10節)では、マグダラのマリアだけが墓に行き、石が取り除かれているのを見てシモン・ペテロともう一人の弟子に伝えます。二人の弟子は墓に行き、イエスの身体にかけられていた亜麻布と頭を包んでいた覆いだけが残されているのを見ました。「若者」や「主の天使」、「輝く衣を着た二人」などは登場しません。

「復活」とは

「復活」とは、どういうことでしょうか。心肺停止状態の人が人工呼吸や心臓マッサージ、最近ではAED(自動体外式除細動器)などで息を吹きかえすこと、いわゆる「蘇生する」ということではありません。一度死んだ人間が「生き返る」ということです。

「そんなこと、あるはずないよ」。この話を初めて読んだ(あるいは、聞いた)人は、だれでもそう思うでしょう。そこでこのイエスの復活を、私たちの知性や理性、論理的思考によって捉えようとする試みが数多くなされてきました。どんな説があったか見てみましょう。

✦ 弟子たちによる「死体隠蔽説」。イエスが生きていた頃、「自分は三日後に復活する」と言っていたのを思い出した祭司長や長老たちは、三日目まで兵士に墓を見張らせるようにピラトに依頼します。もしイエスが復活などしたら、以前より民衆を大いに惑わすことになるからと考えたからです。ピラトは番兵を置いて見張らせました。しかしイエスは、忽然と消えたのです。そこで祭司長らは兵士に多額のお金を与え、「弟子たちが夜中に死体を盗んだ」と言いふらすように命じたという話が、『マタイ』28章11～15節にあります。

✦ イエスの「仮死状態説」。イエスは死んだように見えたが実際には生きていたので、墓から出られたとする説。

✦ 十字架で死んだのは「そっくりさんの替え玉説」。ただただ、笑っちゃいますネ!

✦ 「集団幻視説」。『古代人にとって、それ[幻視体験]がどれほどリアルなもの、人間の実際の行動を動機づけるに足るものであり得た』のであり、『使徒行伝〔ルカによる福音書〕とともに構成する「ルカ文書」2部作の後編〕もパウロの突然の回心〔後日、詳しく書きます〕をそのような幻視体験として描いている』と大貫隆先生は書いておられます。しかし、集団幻視の話〔次回、パウロの「復活のイエスとの出会い」の話で出てきます〕は『さすがに信じがたい』とされます。

✦ イエスの「蘇生説」。イエスはあとで息を吹きかえして、弟子たちに現れたとする説。しかし福音書には、ピラトが兵士たちにイエスの死を確かめさせた話や、百人隊長[百人の部下を率いる隊長。

現代の軍隊なら中隊長、中尉クラス]がイエスの最期を近くで見ていたこと。さらに十字架から下ろされたイエスは、女性たちによって布に包まれ墓に納められた話など、疑いの余地のない事実が記されている、と森一弘師は指摘しています。

⊕ 「弟子の創作説」。復活は、弟子や信者たちの「不滅」への願望やイエスを「神格化」しようとするところから生まれたものであるとする説。これには矛盾があると森師は書いておられます。なぜかといえば、『復活の場面を語る福音書が、復活を知らされた弟子たちが歓喜したとは伝えていない』で、『むしろ、弟子たちは最後まで戸惑い続けて』いたと記しています。つまり、不滅への願望や神格化を意図して復活物語が生まれたとすれば、福音書に『復活を知った弟子たちの喜ぶ姿を描く方が自然』であり、『復活を前にした弟子たちの否定的な反応は、創作意欲に背くことにな』るからです。

⊕ 「復活」は弟子たちの「心理的な体験」とするルードルフ・カール・ブルトマン(Rudolf Karl Bultmann、ドイツの神学者、1884-1976)の説。ブルトマンは「イエスは弟子たちの信仰の中に復活した」のであり、私たちが歴史的に復活を確認できるのは、「復活したイエスと出会い、生き方を根底から変えられた弟子たちの存在以外にはない」といいます。しかし、この説は「生前のキリストに出会ったことのある人物」にしか通用しないもので、『生前のイエスと面識のなかったパウロの復活体験を説明できない』(森師)のです。

「復活」は、現代科学に飼いならされた知識に照らして考えがちな私たちには、なかなか理解しがたい出来事であることは間違いありません。ここで、山浦玄嗣先生は「復活」に関する箇所をどう訳されているかを『ヨハネ』11章で読んでみます。

.....
25 イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」
(新共同訳)

.....
山浦訳ではこうなります。

.....
25 イエシュさまは言いなされた。「この俺には、人を立ち上がらせる力がある。生き活きと人を生かす力がある。この俺の言うことを本気で受けとめその身も心も委ねる者は、たとえ死んでも生きるのだ。」

.....
「復活」はギリシャ語の「アナスタシス(anastasis)」の訳であり、動詞「アニステーミ」の名詞形で「立ち上がる / 立ち上がらせる」という意味です。「倒れているものが立つこと」、あるいはそれを「立てること」であり、死んだ人が「生き返る」ということも「アニステーミ」と言ったそうです。(後日また、山浦先生の復活に関する詳しい説をご紹介しますと考えています。)

次回からは、パウロの「復活のイエス」との出会いと、弟子たちと原始キリスト教団がどのようにイエスの生涯を捉え直し、「復活信仰」を成立させていくかを見ていきます。

- 【引用・参考にした書籍】
- ・森 一弘 『キリスト教入門 Q&A』
 - ・大貫 隆 『イエスという経験』
 - ・山我哲雄 『キリスト教入門』
 - ・山浦玄嗣 『イエスの言葉』 / 『走れ、イエス』 / 『ガリラヤのイエシュ』
 - ・日本聖書協会 『聖書 新共同訳』
 - ・『岩波 キリスト教辞典』
 - ・遠藤周作文学全集 11 評伝II 『イエスの生涯』 / 『キリストの誕生』